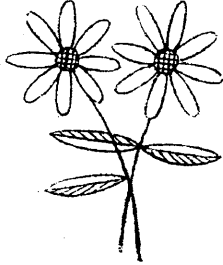


の線切を色良く置けばよいのである。

昼食が終ると又バスの旅が続く。お腹が一杯になると眠くなるのが常で、別に見る所もなく皆、眠っている。今晚の宿泊地は網走。バスは一路網走に向って進む。



## 網走 → 弟子屈

6班 短食 2 の 1, 2, 4  
(村永, 山口, 福田, 谷本)  
(平木, 石田, 松下)

7月21日 (第7日目)

「この朝食は何んとまあ上品に盛り付けてあるのだろう！」

「昨夜の豪華さに比べてあまりの変り様だわ。」

「昨日のが良すぎたのかな!？」

「何んと言つてもあの毛蟹は最高だつたわね。」

例の如く賑やかな朝食を終えて、昨夜の宿である網走湖荘をあとにした。外は生憎の曇空である。それに山頂は霧が、かなり発生している様子。途中でとうとう小雨が降り出してしまった。しかしバスは小雨の中をついて一路、美幌峠へと向かう。『今日は美幌峠と摩周湖です。天気的神様。どうぞ晴れて下さい。』と一心に祈る。しかし峠に近づくと従って増々霧が深くなる。山頂の近く一面に生い茂っている熊笹が、わずかに我々を慰めてくれる。峠に着いてはみたものの、霧が雨のように吹きつけ、視界はゼロ。待ちくたびれ霧を恨みながら美幌峠を後にする。すると、どうだろう。数メートル下つただけなのに、あんなに待っていた屈斜路湖が見えるではないか。皆思わず窓に顔をつけ、見入ることしばし。「ワァー。見える！ 見える！」まるで小学生のように騒ぎ出す。バスは峠を下り、和琴半島を左手に美しい白樺林を尚湖に沿って、昼食の場である川湯へと急ぐ。途中、池の湯の小さな天然の露天風呂におばあさんが一人、バスの騒音をも、ものともせず、静かに入浴しているのを見て思わず微笑んでしまう。池の湯から少し行つた砂湯で下車する。「湖の波打際の砂を掘ると湯がわき出る。」と言うことで、傘を片手に童心に帰えり、一生懸命、砂を掘ることしばし。「アツ！ 出て来た！」「あつい！」あちこちから聞えて来るかわいらしい声。

大鵬の誕生地、川湯で昼食をした後、白い噴煙をもくもくと噴き上げている硫黄山へ向かう。硫黄の為、木は生えず、岩は黄緑色を呈している。「おや／＼」なんだろう。あの人がだかりは。ハハアーン、ナアーンダ。トウモロコシとイカを焼いているのか。今、昼食を済ましたばかりというのに、なんとまあ驚くべき食欲。

霧が少し上がつて来たのに気をよくして、バスは待望の摩周湖めざして一走り。原生林の中の細い道を曲がりながら上へ上へと登る。エゾ松・トド松にぶらさがっているサルオガセが、妙に我々の不安な気持ちを和らげてくれる。男性の浮気、女性のヒステリーにもつてこいの良薬と言われている、このトロロコンプのようなサルオガセが道の両側にずらりと連らなつているのを見ると、何かしら妙な気がする。天気は悪く、霧が立ちこめて視界がきかない。これじや、摩周湖ならぬ真白湖だと冗談を言いながら第三展望台へ着く。しかし霧の為、全然見えない。仕方なく少し下にある第一展望台へ向かう。見えるようにと祈りながら皆一斉にバスを降りる。期待に反して湖の影さえも見えない。皆、霧雨の降りしきる展望台で、とらえどころのない白い闇に目を凝らす。しばらくすると、霧が少しづつ上り始め、湖上のささ波が見えて来た。続いて摩周岳の山裾、それに中島がうつすらと姿を表わす。「見える／＼」「見えた／＼」という嬉しそうな声が聞えて来る。しかしすぐに白い闇に閉ざされて見えなくなる。私達の前にかぶとを脱いだと思われた摩周湖だが、なかなか全貌を現わそうとしない。大方の人は諦めてバスに帰ってしまった。霧は容赦なく吹きつけ、それに寒かった。それでも「見せぬなら見せるまで待とう摩周湖。」とガンバツている人、数人。この気の長い連中にさすがの摩周湖も敗けてしまつたらしい。霧は晴れ始め、湖の姿を前よりも、もつと鮮明に映し出した。交通公社の係の方は、諦めてバスにもどつた人を呼びに一目散にかけてゆく。皆、交通公社の係の方に感謝しつつ、再度展開された、神秘で美しいパノラマに見入っている。霧の上つた摩周湖、今にも引きずり込まれるような深い濃紺の水面。岸辺にそそり立つカムイヌプリ岳、赤い岩肌、それに印象的な小さな中島。言葉で表現しきれない美しさに誰しも寒さを忘れて見入っている。

見えるようで見えず、見えないようで見える。霧でとさされることの多い摩周湖 — 「神秘の摩周湖」 — この湖になんとふさわしい呼び方だろう……。

しばらく私達の前に全貌をさらした摩周湖も再び白いベールを下ろし始め、最初の真白湖へと姿を変えて行つた。

